

人、まち、そしてみんなの思いをひとつに繋げる北十間川

千葉工業大学 学生員 ○飯田 智美
 千葉工業大学 上杉 健吾
 千葉工業大学 門脇 浩嗣
 千葉工業大学 正会員 島 正之

1. はじめに

北十間川は、東京都墨田区と江東区の旧中川を上流端として、墨田区向島付近にて隅田川とつながる江東内部河川であり、荒川水系の一級河川である。元々は人工的に掘られた水路であるが、臭いという住人の苦情から一部暗渠化され、忘れられてしまった河川である。2011年に新タワーが建設されることにより、押上・業平地区に人々の注目が集まった。そして足元を流れ、広域集客拠点である浅草と新タワーをつなぐ唯一の河川として北十間川に注目した。本論文では忘れられた川北十間川を、『いかに再生し、来た人の足を向かせ、賑わいを持たせ発展させられるか』に焦点を当てる。

本論文では河川の機能である治水・利水・親水の観点から北十間川を観察し、沿革・現状を把握した上で、江戸文化の香り漂う下町文化を再生し、新たな観光スポットとしての姿を提言する。また、浅草から新タワーへは隅田川を超え、北十間川沿いを歩く方法が最短である。そこで、北十間川を歩いて楽しむことができ、見て楽しむことのできる川へと再生する。そして、より多くの人々が気軽に足を運ぶことができるよう、『舟運』を取り入れ、活気ある水辺空間を計画する。

2. 北十間川概要

2-1 歴史

北十間川は、隅田川と旧中川を結ぶために1660年頃・江戸初期に開削された。十間川の北方に位置し川幅が十間あったので、この名称となった。当時は木材輸送に重要な役割を果たしていた運河である。東端は中川に流入しており、西端は源森川に続いている。

2-2 現状・問題点

隅田川から北十間川に繋がる部分に水門があり、また密接するかのよう高架線があるため圧迫感を感じる。そして水門管理施設、自転車置き場が併設されているために川から離れて歩くことになる。

ここが、水辺の連続性が切断される第一の問題点である。隅田公園横を押上方向に向かって歩いていくと、倉庫に光を遮断され暗く、さらに水辺を感じることが不可能なため、歩いていて大変面白くない。対岸もマンションや倉庫として利用されているために、水辺を感じることが不可能である。この水辺と遮断された状況が小梅橋まで続く。これが、第二の問題点である。第三の問題点は、小梅橋～東武橋間に設置された樋門である。北十間川の水位調節をするという大きな役目を持っているのだが、ここで船の交通を遮断してしまっている。その結果、船の回遊性をも失い、水上交通の機能を失っている。第四の問題点は、東武橋～京成橋間である。川岸を両岸とも歩くことは出来るが、コンクリートの堤防とフェンスに阻まれ、背伸びをしてやっと川を見ることが出来る程度である。今までに比べれば比較的親水性はあるほうだといえるが、もっと親水性を高めるために改良が必要である。また、通過交通が激しく、人が歩くには厳しい。

3. 基本理念

「人、まち、そしてみんなの思いをひとつに繋げる北十間川」

新東京タワーを観光名所の主軸とし、浅草の下町情緒あふれる歴史と未来の融合。誰もが楽しめる賑わいのある北十間川の水辺再生と地域開発計画。

キーワード 新タワー、北十間川再生、舟運、フットパス、回遊性

連絡先 〒275-8588 千葉県習志野市津田沼 2-17-1 千葉工業大学 工学部 建築都市環境学科 TEL:047-478-0446

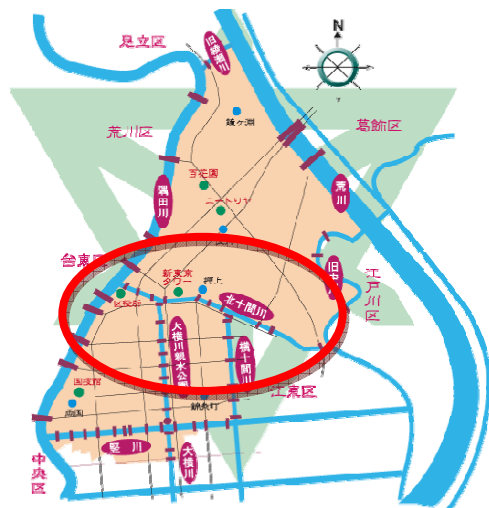


図1 計画地域

4. 基本構想

忘れられた川から新たな観光スポットとなり、たくさんの人で賑わう川となるよう以下に重点を置く。

- ・水辺と市街地の一体的空間の形成「水と緑のネットワーク」
- ・舟運などアクセスの向上。
- ・観光資源・歴史・文化と新スポットの融合。

5. 基本計画

北十間川は、これまで粗末に扱われ、忘れ去られてしまい、臭い・汚いという理由で人々は近寄ろうとしなかった。今日では浄化施設などが設備され、水質も改善されている。しかし、水質が改善されても、護岸は汚れ、水生植物がなく、雑草が多少生えている。水が汚いという印象を与え、大雨時などに下水施設から水が流されているということ、そして何より水辺を楽しむことができないということにある。よって水辺を魅力ある空間に再生し、いかに『賑わい』をもたらすことができるかを追求する。

2011年に新タワーが建設されることにより押上地区も注目され、人も集まることになる。これを生かし北十間川全体を有効活用し、江戸文化を感じさせる街並み、カフェや商業施設の運営、浅草と新タワーをつなぐルートを提案し、舟運を活用する。浅草・新タワーを訪れた人をターゲットとし、誰もが楽しめる水辺空間づくりを目指し、そこに賑わいをもたらす、地域の活性化をも促進する。

5-1 水辺と市街地の一体的空間の形成～水と緑のネットワーク～

現時点の北十間川は、川辺に沿って歩くことがで

きない。押上駅から浅草にかけて水辺を連続して歩くことができる歩道を整備する。釣堀や親水テラスを充実させ、人が集まることの可能な場、憩いの場となるスペースをつくる。四季を楽しめる植物を植え、夜にはライトアップすることで、より魅力を高める。また、子供からお年寄りの方が気軽に利用できるようスロープを整備する。歴史を感じ、魅力ある散歩道として、石垣や石積み護岸を活用した江戸の文化を感じる喫茶、オープンテラスや集客力の高い商業施設を入れ、人の意識を川に向け賑わいをもたせる。また、観光を目的としたバスなどの駐車場として利用する。これにより、人が北十間川へと目を向け、足を運んでもらうことを狙う。

5-2 舟運などアクセス性の向上

広域集客拠点である浅草・新タワー付近は浅草駅、押上駅の交通機関が主要である。どうしたら、足を北十間川へと向かせ、楽しんでもらえるかを考える。浅草～新タワー、新タワー～東京湾へと舟運を計画し回遊性をもたせることで、新たな観光スポットとして注目を集め、お客様がより楽しむことができる時間・空間となることを目指す。現段階では、樋門があるため船が通過することができないので、閘門に代え、通過できるようにする。

5-3 観光資源・歴史・文化

現在ある観光資源を活かし、江戸文化の香り漂う下町を再現する。江戸の街並みを再現するために観光案内版や標識に高札を用い、障子・瓦・ちょうちん・石積み護岸など日本伝統のものを活かし、川との調和を図る。目や耳で楽しむことの出来る水辺空間にし、歩いて楽しみ、船に乗って楽しみ、記憶に残る街となるよう計画する。

6. おわりに

2010年に完成予定の新東京タワーは、北十間川沿いの業平・押上地区に建設される。これを機に忘れ去られた川、北十間川は、『人、まち、そしてみんなの思いをひとつに繋げる北十間川』として、生まれ変わることが出来る。また、北十間川は、浅草から新タワーを結ぶ動線となり、存在意味を今後増して行く川である。ここに、高架下の有効活用、舟運計画、回遊性と拠点をおくことにより、賑わいのあふれる北十間川となるだろう。